

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12959

研究課題名（和文）英米文学と初期米国心理学・精神分析学との関係性：宗教との関連を軸としながら

研究課題名（英文）A Comparative Analysis of English and American Literature with Psychology

研究代表者

宮澤 優樹（Miyazawa, Yuki）

金沢大学・人文学系・講師

研究者番号：00846800

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀後半から20世紀初頭にかけての英米文学作品と、同時期に発展した心理学や精神分析学との比較研究を行った。当時の英米文学を代表する作家であったヘンリー・ジェームズやイーディス・ウォートンは、文学と心理学に共通する関心を捉え作品に表現していた。特にヘンリー・ジェームズの初期作品を中心にそのような視点から分析し、文学と心理学の両方が人間の心へとそれぞれの方法でアプローチしており、双方に影響しあっている可能性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、19世紀後半から20世紀初頭にかけての英米文学と、同時代以降に体系的に整備された心理学が、ある程度共通の関心を抱いていることを、20世紀初頭までの文学作品、心理学的著作を参照することによって確認した。文学研究においてこの成果は、本研究が対象としたヘンリー・ジェームズやイーディス・ウォートン、チャールズ・チェスナットのような作家において、人間の心という視点からの分析が有効なものであることを示すものである。社会においてこの成果は、多くの人にとって関心事であろう人間心理を考えるにあたって、文学作品を参照することが有効な手段であることを改めて認識するよう促すものである。

研究成果の概要（英文）：This study conducted a comparative analysis of English and American literary works from the late 19th century to the early 20th century, alongside concurrent developments in psychology and psychoanalysis. Henry James and Edith Wharton, prominent figures in English and American literature during this period, reflected the shared interests of literature and psychology in their writings. By focusing on Henry James's early works, particularly from this perspective, the study revealed the mutual influence between literature and psychology in their distinct approaches to understanding the human mind.

研究分野：英米文学

キーワード：英米文学 文学と心理学 文学と宗教 文学と思想 心理

## 1. 研究開始当初の背景

作家による文学作品の創作とそれに対する批評を総じて文学的な営みと見たとき、人間の心理はその探究における根源的な問題のひとつである。心を文学という芸術から表現し捉えようという営みが連綿と行われていく一方で、科学的・統計的な手法により心を理解しようとする学問が、19世紀後半以降に整備されてゆく。心理学や精神分析学、それに心理学的な臨床医療が学問体系として完成されてゆくにつれて、文学と心理学は一見して相互の交流に乏しい分野とも捉えられるようになった。しかし実際には、ジークムント・フロイトのような一部の心理学者や臨床家は文学に強い関心を示し、多くの作家はフロイトやユングによる心理学的な成果を自作のインスピレーションとして受容した。こうした一連の流れは文学史と科学史を結びつける融合研究的な成果によって後づけられているものの、個別の作家における心理探究を、作品論的なアプローチから埋めていくべき間隙は多い。そこで、本研究開始当初において、個別の作品を研究対象とし、人間の心に創作上の関心を抱いた作家たちによる心理や意識の扱い方について分析を行うこととした。また、作家たちが同時代の学問的成果をどのように受容したか、さらに、そのような作品がどのように学問へ、あるいは社会や文化へフィードバックされたかを検討することとした。ここから得られる成果は作家や作品への理解を深めるだけでなく、文学研究と、例えば神経科学のような他分野とを架橋することを試みる最新の研究動向に対しても何らかの示唆を与えうるものであろう。

研究対象として、文学にとどまらない幅広い分野の人士と交流を持った作家を中心に選出することによって、学問との、あるいは文学以外の芸術との往来を内包する総合的な芸術として、文学を捉えることを試みることにした。その対象として、ヘンリー・ジェームズやイーディス・ウォートンのような、幅広いコミュニティに所属した作家をはじめ、チャールズ・チェスナットのような社会運動に身を投じた作家のような多彩な作家が対象となりうると判断した。

こうした多岐にわたる問題に取り組むにあたって、一つの軸となりうるのが宗教であった。とりわけ米国の文学・文化において宗教が果たした役割は極めて大きく、それは心理を含む人間理解においても同様である。研究代表者はこれまで、文学作品と宗教的な思想との関係を研究しており、それを端緒とすることによって本研究へのスムーズな導入を図ることができた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀後半以降の、文学と心理学が分離した分野とみなされ始める時代から、心理学や精神分析学が本格的に体系化される20世紀初頭までの時期を対象とし、その時代の文学と心理学との交流を、個別の文学作品を研究することにより明らかにすることである。とりわけヘンリー・ジェームズやイーディス・ウォートン、あるいはチャールズ・チェスナットや他の作家による代表的な作品において、どのように表出しているかを明らかにすることである。特に、意識の問題を探究したことで知られるヘンリー・ジェームズの作品において、その問題を多角的に考察することは本研究の重要な目的のひとつである。同様の問題が、イーディス・ウォートンの作品においてどのように表現されているかを考察することも目的に含まれる。さらに、チャールズ・チェスナットやフラナリー・オコナーの作品を考察することによって、彼らの抱いていた関心が、心理や意識の問題とどのように結びついているかを検討する。

具体的には、例えばヘンリー・ジェームズの初期作品に対して、上記の観点から考察を加える。ジェームズが意識の問題を取り扱うにあたっては、主に後期の作品が考察の対象となってきた。しかし、特定の短編作品には後期の作品と共通の題材が存在し、それを検討することにより、ジェームズ作品における意識の取扱方の変遷を追うことができる。さらに、初期と後期に共通する題材は、ジェームズが外部から、とりわけ宗教的な文化から引用したものである可能性があり、その重要性について吟味することが目的のひとつである。

## 3. 研究の方法

本研究は、心をめぐる文学作品と学術的成果との関係性という問題を設定しながら、それを個別の作品から検討していく作品論的研究の立場をとる。そのため、以下のような作業を作家ごとに行なった。(1)関係する文献の収集、(2)それら資料の分析と読解、整理、(3)成果として公表するための考察と取りまとめ。続く項目ごとに記載した各作家につき、これらの作業を基本的に行なった。

### (1)ヘンリー・ジェームズ作品の考察

先述したような重要性を持つヘンリー・ジェームズの作品を研究するため、以下のような方法を採用した。初期の作品『ロデリック・ハドソン』やその他の短編作品について、意識や宗教とい

った問題に関係する部分について考察する。それを後期の作品と比較検討することにより、ジェイムズにおいてその問題がいかに捉えられ、作品内で表出されたかを考察する。それと同時に、ラルフ・ウォルドー・エマソンやヘンリー・ジェイムズ・シニア、あるいはウィリアム・ジェイムズのような、関連性の強い思想家との比較検討を行った。

#### (2) チャールズ・チェスナット作品の考察

チェスナットは人種問題を題材とした作家として知られ、意識や心を直接的なモチーフとして扱った作家としては知られていない。しかし、人種のような自己をどのように捉えるかが関わる問題において、意識は間接的ながら作品において描かれる。本研究では、チェスナットの代表的な短編作品「若き日の妻」における意識を、同時代の思想を参照しながら検討した。

#### (3) イーディス・ウォートン作品の考察

ジェイムズとの関係が深かったウォートンの作品は、ジェイムズの問題設定と近いものの、そこにはより明瞭な宗教的問題意識がある。本研究では、ウォートンが愛読書としていた思想書を参照することにより、作品との比較検討を行なった。また、近い主題が描かれていると思われる他の作家による作品群を考察対象に含めた。

### 4. 研究成果

#### (1) ヘンリー・ジェイムズ研究における成果

上記の方法と関心による研究を遂行し、国際ジャーナルの査読つき論文2件、国際学会での発表1件、その他国内での論文発表や口頭発表を含む成果を得た。アメリカ文学分野における代表的なジャーナルである *American Literary Realism* 誌において発表した論文では、ジェイムズの長編作品『ロデリック・ハドソン』において、芸術家の主人公による創作が、ジェイムズの関心の対象であった特定の思想(キリスト教やギリシア哲学)と強く結びついていることを明らかにした。また、ジェイムズ研究における中心的な役割を果たす *Henry James Review* 誌には、短編小説「オズボーンの復讐」における精神疾患の描かれ方を分析し、その意味合いが後期の作品と共通する重要性を持つことを指摘する論文を掲載した。さらに、その延長として、後期を代表する作品である『ねじの回転』における同様の問題について論じ、Henry James Society 主催の国際学会において口頭発表した。

また、チャールズ・チェスナットの作品を先述の方法により論じ、米国南部の文化を取り扱う *Mississippi Quarterly* 誌に掲載した。ここでは、短編小説「若き日の妻」に描かれる人種的な意識を、思想や先行作品との比較検討により論じた。また、研究成果の社会への還元として、「若き日の妻」を日本語に翻訳し、大学図書館リポジトリにて公表した。

さらに、イーディス・ウォートンの作品を研究することによって、そこに描かれる宗教的な意識において、旧約聖書や、19世紀イギリス文学との共通性を見出した。そのことにより、ウォートンの作品論のみならず、例えばチャールズ・ディケンズやジョージ・エリオットのような、19世紀の英国を代表する作家へも研究上の関心が拡大した。ウォートンに加え、ディケンズやエリオットについても論文を執筆し、原稿が完成している。これらはいずれも査読付きのジャーナルにて発表する予定である。

発表済みの研究成果については、それら単体としてインパクトのある内容のものを、影響力のある国際的な媒体において発表することができたと考えている。今後はこれらを総体として著作にまとめることを目指す。また、キリスト教にとどまらず古代ギリシア・ローマの芸術や思想、あるいはイギリス文学におけるモラルの描かれ方が、本研究で取り扱った作家や作品と有機的な関連性を持つ重要なテーマであり、そこに今後の発展性を見出すことができたことも、大きな収穫であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮澤優樹	4. 巻 15
2. 論文標題 [翻訳]チャールズ・W・チェスナット作「若き日の妻」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/0002000651	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Miyazawa Yuki	4. 巻 55
2. 論文標題 Will to the Original: Platonism in Henry James' Roderick Hudson	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 American Literary Realism	6. 最初と最後の頁 153 ~ 166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5406/19405103.55.2.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazawa Yuki	4. 巻 74
2. 論文標題 A Marriage between Tricksters: Literary Heritage in Charles W. Chesnutt's "The Wife of His Youth"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Mississippi Quarterly	6. 最初と最後の頁 271 ~ 287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/mss.2022.0008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyazawa Yuki	4. 巻 43
2. 論文標題 Mental Health and Happiness in James's "Osborne's Revenge"	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Henry James Review	6. 最初と最後の頁 268 ~ 273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1353/hjr.2022.0021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤優樹	4. 巻 38
2. 論文標題 Flannery O'Connorにおける場所の感覚--人種から考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yuki Miyazawa
2. 発表標題 Letters to Unspecific Readers: James 's Words of Solitude
3. 学会等名 9th International Conference of the Henry James Society ( 国際学会 )
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮澤優樹
2. 発表標題 世紀転換期米文学における信仰と懐疑心
3. 学会等名 南海大学・金沢大学ジョイントワークショップ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮澤優樹
2. 発表標題 Flannery O'Connorにおける場所の感覚--人種から考える
3. 学会等名 日本アメリカ文学会北海道支部（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------